

よしまい

2021年 7・8月



葉っぱになりきっているつもり？のアマガエル

目次

- 公園の風景
アマガエルの得意技・・・1
干潟ふれあいゾーン・・・1
手話で話そう・・・1
絶滅危惧種 ニラバラシ・・・1
- きらら浜 蜂蜜物語 ⑤・・・2
- みんなのひろば
センス・オブ・ワンダーを読む・・・2
- 活動紹介
研修旅行は 洞窟探検付き・・・3
シロチドリさん、いらっしゃい・・・3
今年も夏・子・・・3

発行：「葦の会」機関紙チーム

事務局：〒754-1277 山口市阿知須 509-53

きらら浜自然観察公園内

電話 0836-66-2030 (FAX 66-2031)

「葦の会」は きらら浜自然観察公園で活動するボランティアグループです。自然を楽しみながら、その素晴らしさを一緒に学び伝えていきませんか？

会員募集中！（高校生以上）

公園の風景



= アマガエルの得意技 =

はじめじめして鬱陶しい梅雨空になると、待ってましたとばかりに元気に鳴き出すアマガエル。雨が降り出すのを察知するのが得意なのはその名の通り、他に木登りや体の色を変えるのも得意で、木の上で葉っぱの一部になりすましていたり、体の色を変え壁に張り付いてピンク色っぽくなっていたりします。たまに話題になる青いカエルは、自分で色を変えているのではなく突然変



木の穴からこんにちは

異で色素が欠乏しているものです。餌を見つけると飛びかかって短い舌で捕まえます。そして目を閉じることによって口腔内に引っ込んだ眼球で口の中のものを喉の奥に押し込みます。

稲作が始まって以来、人と共にあり、更にはキャラクター化もされて愛されてきたアマガエル、実に興味深い存在です。

= 干潟ふれあいムーン =



潮が引くと出現するビクターセンター前の干潟ではカニやトビハゼが観察できます。しかし、油断すると膝まで埋まって抜けなくなるほどぬかるんでいて、歩くのが難しいのが難点でした。

そこで最近、干潟の一部に砂を入れて遊歩道を作り人が歩けるようにしました。ここでは埋まる心配もなく干潟の小さな生き物を間近でじっくり観察できます。公園では干潟の観察会もやっています。参加してみては！

= 手話で話そう =

SHIRAHAMA 自然観察公園

手話教室

受講者募集

自然観察を通して
楽しく手話を
学ぶことができます。
初心者の方も大歓迎！

日時：毎月第4土曜日 10:00~11:00
【但し初回は7月31日(土)】

場所：しら浜自然観察公園 レクチャールーム

講師：松永清美先生 (小郡手話友の会代表)

費用：無料 ※但し入館料19歳以上入館料200円が必要です

申込：6月25日(金)開始

定員：先着15名

問合せ：しら浜自然観察公園

電話：0836-66-2030

メール：kirara-m@gaea.ocn.ne.jp

詳細は公園まで

= 絶滅危惧種 ニラバラン =

ラン科植物の「ニラバラン」。県下では絶滅危惧種 I B 類に指定されている貴重な植物ですが公園ではあちこちで見かけられます。5月初旬から6月まで葉色と同じ緑色の小さな花をつけます。草丈 20cm 程でラン科でありながら実に地味な植物なのです。それゆえに気付かれることなく摘み取られることもないのでしょう。地下に球茎をもち、地表に伸ばした 1 本の茎の上部に 3mm 程の花を 20~30 個 穂状に付けます。更にニラに似た葉は細長い中空のものが 1 枚だけという、なかなかの変わりダネです。



野生植物の大家、中沢・徳光両先生によるニラバラン観察会が、汽水池の砂浜近くを観察場所として5月末に開かれました。日当たりの良い場所により多く見られることを確認し、ニラバラン以外の植物の説明にも参加者一同、熱心に聞き入りました。先生方もまた公園の植物が自然の状態で生息していることに感心されていました。

きらら浜 蜂蜜物語 ⑤



初夏、園内のハゼ、アカメガシワなどの花を訪れていたミツバチたちは、その後ヒメジョオンなどの雑草の蜜や花粉をせっせと巣箱に持ち帰っています。園の外にも出かけて行きますが、ミツバチは近くに豊富な蜜源を見つけると、ほかの花には浮気をしないでその蜜源だけに集中して通うそうです。小さな身体で1日に何往復もするので、その方が効率的だということを知っているのです。人間顔負けの知恵ですね。

養蜂家はミツバチのために巣箱を用意して環境を整え、花の少ない時期には砂糖水を与えるなど世話をし、ミツバチから蜂蜜を分けてもらいます。「花蜜でおなかを満タンにして、フラフラしながら帰ってきます。」と養蜂家のNさんは愛おしそうに話されます。



古巣を飛び出し、とりあえず近くの木の枝へ移動

働きバチが蜜や花粉をたくさん集めた分だけハチの数が増え群は大きくなります。そして一つの巣に新しく女王蜂が生まれると、古い女王蜂が自分の群の半分を引き連れ巣を出て行く「分蜂」が行われます。その後、気に入った新



天地が見つかるまで、しばらく近くの木の枝に女王蜂を守るように大きな塊になって群れているので、養蜂家はそれを捕まえ新しい巣箱に入れてハチの数を増やしていきます。

つづく

みんなのひろば😊

センス・オブ・ワンダーを読む

コロナ禍で自粛生活を続けております。TVが友達になっているのですが、「沈黙の春」で有名なレイチェル・カーソンが書いた「センス・オブ・ワンダー」という本も読みました。

毎年、夏の数か月を過ごす、浜辺から森の続く土地にある別荘で、幼い甥のロジャーと過ごした数年間の出来事や思いが細かく記述されています。自然と関わることの喜びや感動などから豊かな感性を持つことができる。そしてこの感性は、その後の社会生活で生じるいろいろな問題の解毒剤になると述べています。

なかでも、「私は、子供にとっても《知る》ことは《感じる》ことの半分も重要ではないと固く信じています。」という言葉が印象的でした。公園ボランティアとしては、知識や見守りも必要ですが、来園者とともに驚いたり、喜んだりして自分も楽しむことも大切なことと思いました。ただし、感受性を持続するためには好奇心を持ち続ける人生を送ることが求められているようです。私にはこれも大変なことなのかもしれません。(T.N)

*センス・オブ・ワンダー = 子供が生まれながらにもっている、神秘さや不思議さに目を見張る感性



活動紹介

= 研修旅行は 洞窟探検付き =

6月6日(日)、公園行事の「秋吉台の自然を訪ねて」に葦の会のメンバー10名も現地集合で同行し、野鳥や植物を観察しました。カッコウやウグイスの声を聴きながら、濃い紫のウツボグサや真っ白で猫のしっぽのような形のオカトラノオなどが咲く台地を歩き、背の高い草の先にとまるホオアカ、ホオジロを観察。どこかでキョキョ、キョキョキョキョ♪と鳴いていたホトトギスも最後にすぐ近くを飛び、普段あまり見ることはない姿を見せてくれました。



午後からは葦の会だけで洞窟探検。秋吉台には観光用に開放されていない洞窟が40以上もあるようですが、その中の一つを地元の環境アドバイザーの田原さんに案内してもらいました。各自、頭に貸し出し用ヘッドランプを付け長靴をはいて、いざ！石灰岩のガレキがゴロゴロしている暗く湿った洞窟を奥へ奥へと進んだところで、田原さんに促され一斉にライトを消すと、そこは漆黒の闇の世界でした。



この世へと戻ってくる途中、水に流され迷い込んだアカハライモリを発見。彼らは闇の洞窟内では生きられないようで、見つけた6匹を明るい地上の水田に放してやると元気に動きはじめ、見守っていた一同もほっとしました。



= シロチドリさん、いらっしゃい =

<俳句教室優秀作>

鳥が少なくさみしい公園の夏を盛り上げようと、かつてシロチドリが繁殖していた通称「中の島」を再整備する計画が立ち上がりました。シロチドリは裸地を好みますが現在の島はほぼ全面をヨシに覆われています。しかも干潮時しか渡れないので、有志が集まり少しずつ確実にヨシを除去する作戦をとることになりました。ヨシの根は残るとすぐに復活してしまうので手作業で丁寧に取り除くのですが、砂利の隙間にはびこっていてなかなか簡単な作業ではありません。しかし干潟を通り抜ける風は気持ちよく、何よりやりがいと達成感大！この活動はまだ続きます。気持ち良く汗を流したい人、未踏の島に冒険に出たい人、将来シロチドリの喜ぶ顔を見たい人など、ご参加お待ちしております。

湖の水面打ちゆく走り梅雨

やまももを手繰りて雫降り注ぐ

貞代

はるか



= 今年も夏・子 =



夏休みの子供たちへの恒例の観察会、今年は7月24日(土)の開催を予定しています。葦の会の主催なので、我々の思い入れもひとしおです。会員Yさん制作によるすてきなポスターで皆さんへ告知しています。去年のようなスコールには会いませんよ

5月 6月

<編集後記> 今年も折り返しを迎えました。機関紙チームは、日々記事のネタを探して公園のイベントや風景に目を光らせています。本機関紙「よしきり」を読まれた皆様、是非感想など葦の会メール ashinokai.kirara@gmail.com までお寄せください。(TKO)